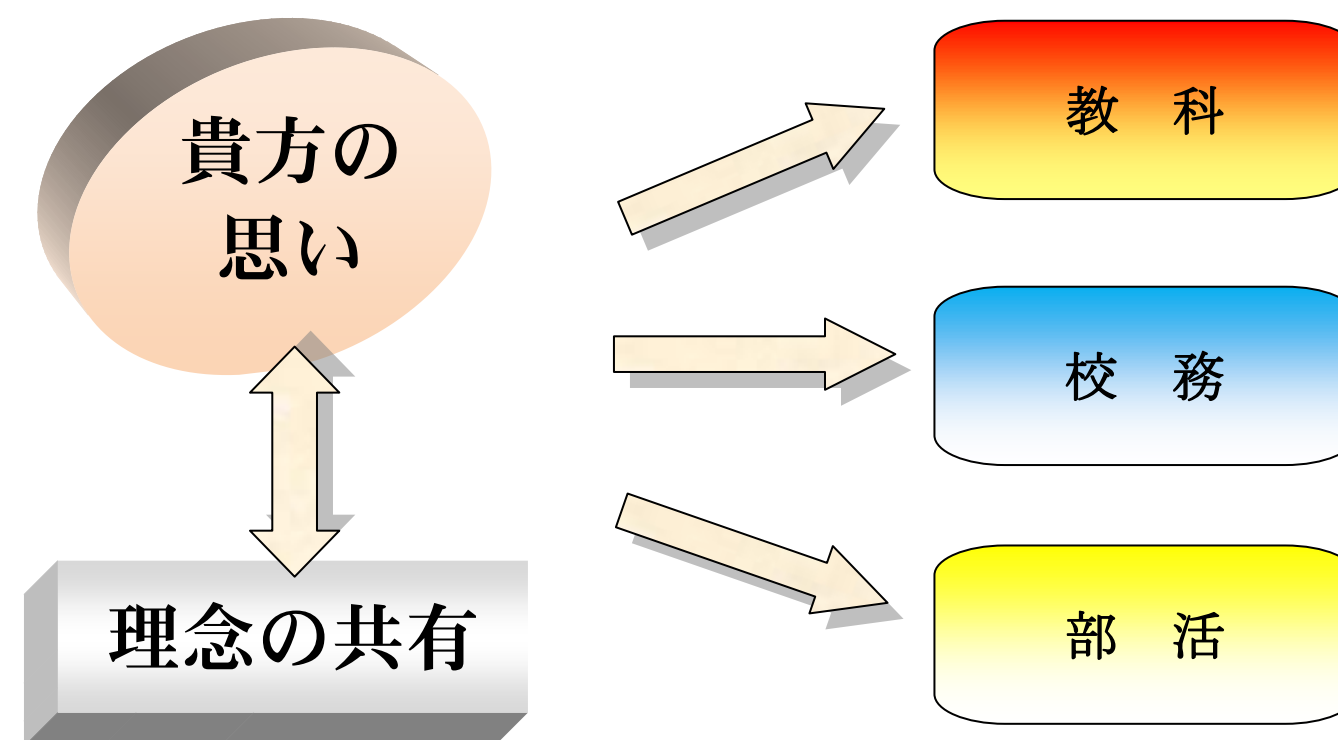


あなたの
夢で
日本を変える

「郁文館」で「想い」と「実現」させる

□ 生徒の夢を育み、寄り添い、感動を与える方法を考える



■ 理念と貴方の想いを合致させ、具現化する学校

「郁文館」で教師として働いている姿をイメージしてもらいたい。それがこの冊子を作成した理由です。貴方が描いた教師像を「郁文館」の教壇に立って、実現していただく一つのきっかけになれば幸いです。

本校の教師は長い時間をかけ、「想い」を様々な行事や企画へと「具現化」させてきました。自らの想いがつまった行事や企画を通じて、子どもたちが目ざましい速度で成長していく姿を傍で見られるから、さらに自らの仕事にやりがいを感じられるようになり、よりわくわくして仕事に臨めます。

「郁文館」は「子どもたちに夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせる」学校です。ぜひ、貴方の想いを子どもたちに伝えていただき、子どもたちの夢の選択肢を広げてください。端的ではございますが、創意工夫をしている本校教員の様子をご紹介します。ぜひ、本校で貴方の教師としての「想い」を「具現化」してください。

採用・新人研修担当 古宇田 哲史（10年目 国語科 校務主任）

他校連携／高大接続企画

小浜 龍太郎（9年目 国語科 統括主任）

「常に考える」

何かが「できた!!」という安堵を得たことはありません。その一方、日本の学校教育底上げを目指し、いつか日本中・世界中の学校を繋ぐ拠点に郁文館夢学園がなること、そして世界の人々に少しでも貢献することを追い求める。だから私は「常に考え」ています。「これでいいのか?」「もっといいことがあるのでは?」と考えています。写真は「アフリカゼミ・コンゴ民主共和国研修」の様子です。アフリカ大陸への憧れ、発展途上国支援のあり方を追究したい。そんな生徒と「本場」の大地を踏み、心に揺れる想いを具体的なカタチにする。準備しても準備しても改善項目が尽きない。それでも実践し続ける。そうした者にだけ分かる感動が湧き起こる。創設3年目に入った「協働ゼミ」は果てしない活動の舞台が社会と世界に広がっている。だから生徒はどこまでも想像と創造を繰り返す。体を張って、知恵を絞って、耳を澄ませて、目を見張る。良いと言われることはまずやってみる。読んでみる。そうして社会人としての基礎体力を養ってきたことが今の仕事の根底に流れています。振り返れば自分が新しく始めた仕組みや企画がその数を増やして来ましたが、新しいことがいいことではありません。ただひたすらに愚直に進んでいくことが重要だと改めて感じています。その他、様々な活動を学校HPやFacebookに記載しています。ぜひ、ご覧ください。



情報リテラシー教育

田中 善将（6年目 数学科 校務主任）

「情熱を帯びた意志の表現」

VR元年と言われる2016年も、もはや下り坂の半ばである。量子テレポーテーション理論の活用が示唆され通信速度が加速される。世ではボーダレス化が及ぼす影響以上にマシンが職業を奪ってゆく。自動運転機能搭載の自動車が世で販売され、AIが企業の業務に活用されている。また、医療機関ではもはや診断を下すソリューションとして検討されている。シンギュラリティの到来が想像に難くない時代が来た。

ICTスキルはすでに一世代前のそろばん術に過ぎず、如何に課題を解決して価値を生み出していくかという明確なビジョンと、真の実現能力、とりわけコーディングスキルが求められている。

本学園では、情報リテラシーを含む表現力を中学で、高校・グローバル高校ではプロジェクトベースで課題解決能力を養う。教員も驚異的なスピードでバージョンアップが求められ、その仕事はもはやティーチングからコーチング・ファシリテーションへと重心移動し始めている。

下の写真はGoogle本社に生徒を引率した際の様子である。Google Appsを日本一活用している本校は先端技術を駆使し生徒に真の表現力を身につけさせる。

貴方が実現したいことをぜひ本校で実現してもらいたい。



求められる人財へ

五年目の「真価」

三年目の「挑戦」

初年度の「勉強」

地域連携／協働企画

藤井 崇史（7年目 社会科 校務主任）

「知恵と教養とタフネスを身につけさせる」

厳しい実社会で戦うための、「知恵」と「教養」と「タフネス」を身につけさせたい。このグローバル社会において日本の大学生は世界中から「教養がない」と馬鹿にされている。「大学に行った」「大学で勉強した」ということは、何の強みにもならなかった。高学歴と呼ばれる学校ですら、学歴は「手に職」と言えるほどの武器にはならない時代となった。

「強い武器」を手に入れるためには、「何かを本気で“深く”突き詰める」ことが必要だ。また、一つのことを周辺分野にまで突き詰めていく研究姿勢なども、大きな武器になる。現代において、「武器」とは学ぶ姿勢と、突き詰めて考えるための「知恵」と「教養」、そして「タフネス」だ。これが私の指導の根底であり、生徒に求める「自立」の定義である。

勉強の原点とは「知識を知恵に変えること」だ。授業では知恵の材料となる知識を伝え、リテラシーを養うべく問いかけをしている。しかし、週2時間程度の授業回数では時間は足りない。そこで、協働ゼミというPBL型のゼミ学習を実施している。

その一例が地元谷根千の活性化を目的とした「やねせんプロジェクト」である。



アクティブラーニング

三日市 綾花（1年目 国語科 常勤講師）

「真剣に楽しむ」

「からだで感じる古典」を目標に掲げ、実験を繰り返す日々です。勉強が好きではなかった自らの学生時代に、教員人生の中で最も近いこの初年度にこそ“楽しく学ぶ”ための手法を考え、多くの引き出しを作るべきだと考えております。郁文館には様々なイベントがあり、子どもたちはそれぞれの輝きを各所で発揮しています。それをいかに授業で活かすか。クラスを1つの“集合”として扱うのではなく、各々に意欲を持つ“個”と捉え、学びの場でも子どもたちが自らの長所を存分に活かせる、そのような授業を目指しております。

右下の写真は、「かるた」を用いた故事成語を学ぶ授業です。楽しんでこそ、より深い学びを得るための力が湧く。面白いから“やってみる”気になる。「覚えてきて。テストをするよ」と言うよりも、遥かに伸びる。これがアクティブラーニングの最大のメリットです。

雨に打たれるようにただ授業を聞くだけでは退屈です。それぞれが部品をひとつずつ作って持ち寄り、一台の車を組み上げるように、それぞれが試行錯誤し、それを全員分集めた結果、新たな学びが得られる。そんな“動き”を集めた授業こそが、生徒自らの「学びたい」という意欲を最大限に引き出す、「真剣に楽しむ」姿勢を醸成すると考えております。

